

馬の廻りと放しと相圖の旗と目懸敵の真中へ鑽て入る支う者ゐる突伏
突伏欠通る謙信馬上より自ら太刀をさしきり敵を切伏蹴飛ばし立ち
駈通り給ふ武田方をうぐと逃散る愛お信玄の御側お廿八部皆歩立
勇士有是や天守護の十五童子或は般若護法の二十八部皆歩立
あて君と守りし上杉の士人切込と左のさそと踊出火水あまつて相戦
此間お謙信の馬を扣るの床机と信玄と見究めめひと逃て飛
乗付三尺寸小豆長光馬上より切され下り切付る其時信玄の床机は有
るから軍配團扇あてとやと受止七太刀の受とづ一肩先は二太
刀二の腕は二太刀痕と受る其時二十人衆の内原大隅守何者大將さう
付る故其俵欠つけ信玄の後あり其背具柄の鎧あつて謙信お突
るお綿々を扣く故又突係る是れ中へ馬の二ツあ當りし謙信の馬はお
驚き遙ろあたるの方へ欠出と此故お謙信物別と成此時上杉の馬
廻り十二人お山士お蕃頭須賀但馬守一ツと成て信玄の床机の元へけ
寄んとて甲州二十人お真田兄弟勇猛とあつて君の向ふは屏風とあり
て金剛力士寄来る者と突伏く一人お御傍お寄附と命限りお相働
此時原大隅守大音上げ如何お味方の面々只今妻女山お小山田真田高
坂小幡欠付しを軍々十分味方の勝利と呼りける武田方ははお勇立相
戦ふ越後方お俄お氣おはして荒手の大軍駈付る軍々最早是迄と村と
崩れお右往左往お引退く原大隅お武畧類ひは是今の三言當意を
く妙敵と弱味方と救ふ金言へ今日信玄危うし処原大隅お働さあて

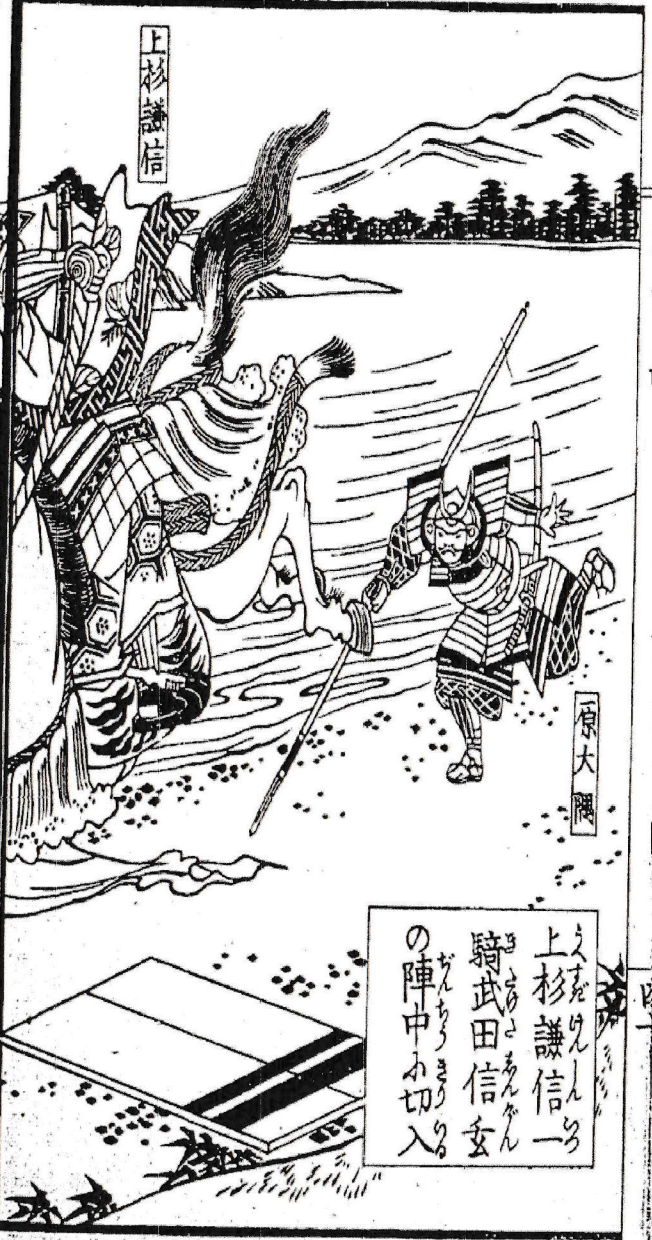
「高坂弾正 川中島」

(甲越川中島大戦記、山口亀吉著、明 21. 12、国立国会図書館)

助け奉る其功莫太之時謙信の衆なり放生月毛一さんお欠出を
謙信の信を討りし跡は心で我振る給ふ故お落馬させらる放
生月毛の長坂の陣お馳入る此時謙信の馬廻り芋川平太夫守野尤
馬次和田喜兵衛石井藤四郎御跡を召し来りし御馬おれ故皆とる
宇野枕馬次敵中へ取とり鐘を馬武者と突落し其馬を引來り君を奉
るされバ今日辻風頻り吹て敵味方共目さへ開き難し其上人馬の馳違
ふ砂煙り空へ吹あげ一面は猛くして霧のどく夜と思へ日輪有敵も味
方も旗を矢ひ馬印を分らず武田方あての信玄討とひりと騒ぎ立
る是と見て内藤修理亮真田源太左工門原隼人ら大音揚味方の
情かと落と可らず御館様の御機嫌能御座まうと呼りし馳



武田信玄



上杉謙信

原大隅

上杉謙信一
騎武田信玄
の陣中へ切入

廻り勇を付し、以時妻女山へ向ひ、十頭高坂彈正昌信、飯富兵部少
捕虎昌馬場氏部少輔景政、甘利左衛門尉晴政、小山田備中守昌時、小
幡尾張守信定、真田彈正忠一、德次郎、小山田弥三郎、信重、芦田下野守相本
市兵工政朝二万余人、敵は出ぬれ無念くと、敵陣残り、焼拂ひ山
を下り、大將の御身の上と案事、川中嶋へ出んと、周章とある、千曲川を越え、
時一德次郎高坂彈正に向ひ、様な折柄あり、敵より忍びて入て、城を焼んとす
計り難、貴殿あり、城の辺りあり、是を因て高坂の實あり、尤と二千余人と引分
て、海津城へ急ぎ、残り九頭へ我先と川を越え、初め、けが真田彈正、本音
場方、周章、公なる御家形、うぐく御座る、さうぞ精くと、さう場中不替足
と力ありと越えんと、ききひく、川端へ出る、爰へ越後方甘粕近江守數
直、今日の後殿と、千曲川の端、今日の九の扇の纏と、押立馬と水面
の、をまを大長刀と馬の平首、つけ招き、さう有さぬ、是を關羽が青龍
刀、啄木の大鎧、鳴戸頭の甲、秋田黒の馬、打ま、さう二百余人と
二行、お川の向ふを白眼敵と待、其時武田の九頭へ我先と服帶と
水はひじ、蹄波をけ、さうと衆入り、是を見て甘粕近江守、麾とあり
立士卒、あ、下知、う鉄炮と打立、自ら川中へ衆込、長刀柄長、追取の、雷光
車輪、お、桂倒、水烟りと立、脳、け、さう渡り、うぐ、甲、加勢、胸板と打、技、きせ
と射通、さう人馬共、お流、さう者の數と知ら、水、お、心、紅とあり、立田の秋、お
さう、さう七百余人討、さうける甘粕が英勇、甲兵二人も渡、さう防、さう止、是、豪傑
武田の智識、武田方へさう川上へ行、廻り、犬ヶ瀬、猫ヶ瀬、廣瀬の渡り、思ひ

思ひ先と争ひ信玄の御旗を力あふ勇立猛龍鬼神の荒るるぞ
無二無三あ切て保す余する討取と攻立く切合を終日戦ひつ
越後方一万余人の荒手の當られ忽ちあつと乱立八幡原より陣場河
原の方散りて引行と退掛退詰討取程の道に死網代の魚重り掛る
死人の山數千人討とりあふ武田太郎義信の重手を肩で給て鞍つや
あ流る血とて中を御父信玄の床机の元へ來り給ひ敵の毎く退
参仕り當手御勝利と相見候と仰上る信玄中ニテ所の疾の肩
給と平全而床机と立四方を御覽有べ八幡原より丹波嶋迄敵
の死骸あ山と成りあふ直江山城守甘粕近江守の三日過て静くと
越後引取ける相も此度武田方討死の人の武田元馬之公諸用豊後守

山本勘久二条三郎初鹿野源五郎三枝新十郎小宮山忠元工門
日向數馬本と初して士大將物頭二千八人士平四千六百三十人あ過む
上杉方討死備への物頭二千八人士平九百人あ余る手負五千余を
ぞ両家討死合て九千人あ余る猶以後も合戦止ざりしが永禄七年子の
七月京都より足利將軍義輝公御扱ひして伊勢元馬亮定一近藤
義作守盛久両家使者往來して和睦教止ひける依て信濃四郡の
埴科更科の二郡と越後あ返りけり村上義清入道子息源五國清父子
共の再度古郷あ立歸り坂本御所津の館を構て住給ふ元龜元年正月
十日義清死去今埴科郡坂本あ曹洞宗万仙寺にありて御位牌有
是偏の上杉謙信公の御武徳のさせる処ありと皆い言ひ傳へける

明治廿一年十二月二日印刷
全 年十二月十五日出版

著作兼
印刷者
癸行

東京日本橋區濱町三丁目三番地
平民

山口 龜吉

全

全所

賣捌所

千 松 堂